

ほおずき窯について

お話 柴田 とみ子 さん

■ 陶芸を始めたきっかけ

この道に入ったきっかけは、たまたま陶芸作家さんのことが書いてある婦人雑誌を見たことです。当時、勤めていた仕事を辞めて、一生続けられるような仕事をしたいと考えていた時だったので「面白そうだな」と思いました。

そして、陶芸が盛んな岐阜県の大垣市とか土岐市、愛知県の瀬戸市とかに惹かれて一人旅をしました。陶器のお店を見て歩いていると、皆さん親切で、作家さんのところや、愛知県瀬戸市の窯業訓練校まで岐阜から連れて行ってくださいました。

その窯業訓練校を見学した時の帰りに、願書までいただいたので「試験を受けてみようかな」と思いました。そこでは1年間、実地はおもに「ろくろ」を、学科では焼き物の薬や土、歴史とかを習いました。その時、ろくろがとても面白くて相性が合うなと思いました。翌年からは、瀬戸市赤津の小さな窯元で2年ほど勉強しました。

瀬戸市では、窯名を人の名前とかではなくて、あざみ窯とかさつき窯とかつばき窯とか、植物の名前をつけた窯が多かったので、私は好きだった「ほおずき窯」という名前をつけました。早いもので、40年も経ってしまいました。

■ 作品について

おもに食器を作っていますが、植物の絵を描いたものが多いのが特徴です。

土は信楽焼きの所から、黒っぽい土や白っぽい土など何種類かを取り寄せています。

ろくろで作る方法と、ろくろを使わずに切ったもので作るたたら作り、それから猫の箸置きなどは手で作っています。

素焼き前に黒っぽい土に白い泥で絵付けしたり、掘ったりして、素焼き後に色をつけて、上薬を塗って本焼きしています。すると、上薬のガラスが溶け込んで色が出てくるわけですね。近頃は、いろんな色を付けています。



絵付けは、好きな桜などは花びらを1枚1枚描くので、手間隙がかり肩も懲りますが、細かいことをしていると落ち着きますし、嫌いではないですね。

窯は、電気窯を使っています。素焼きを720度、本焼きを1230度位まで上げて焼いています。還元焼きといって薪も入れて色合いをよくしています。

使って下さる方が料理を盛る時に、使いやすいものにしようと思って作っています。「大事に使っているよ」と言ってくると喜びを感じます。

大変なのはデザインですね。好きな植物を描いていますが、デザイン力がないので、「これを描きたいな」と思ってから、モノになるまでは、何度も試行錯誤しています。無地も好きですが、ほおずき窯っていうと絵付けっていうイメージがあるので、絵柄があったほうが好まれるようです。

最近は庭でバラ作りにはまっています。バラの絵の器もつくりはじめました。これからもこの仕事を、自然を眺めながら淡々と続けていきたいですね。

取材 / 平成31年2月17日



柴田とみ子(しばた とみこ)氏

昭和30年(1955)朝日町大滝生まれ。昭和53年(1978)愛知県立窯業訓練校入学。2年ほど瀬戸の窯で勉強。昭和56年(1981)朝日町大滝に「ほおずき窯」を開く。